

『オメガバース サイコメトリストは闇に抱かれて啼く』

著：黒兎

ill : minato.Bob

「……っ、はあっ……」

息苦しい。割れるような頭の痛みを堪えながら、宗方恭はゆっくりと瞼を開いた。

薄い栗色をした長い睫毛がふわりと揺れる。その下から現れたのは、さらに透きとおりそうに淡い茶水晶の瞳だった。

高い熱を孕んで濡れた双眸が、荒々しい音を立てて叩かれるドアを冷たく睨み、いっそう昏い陰りと妖しい艶を滲ませた。

人工レザーが所々破れ、スポンジのはみ出した古ぼけたソファーに横たわる肢体は、どこまでもか細く、指先までが繊細なガラス細工のような脆さを感じさせる。

素っ気ない白いシャツのボタンはすべて外され、純白を仄かな薔薇色に染めた肌の上をしどけなくすべり落ちていく。

ドアはなおも乱暴に打ち鳴らされ続けていた。ひどく耳障りなそれが、恭の胸をギリギリと締めつける。

市街の外れ、ほとんどスラムに近いエリアに建つ小さなアパートは、かなりの年代物で壁も薄かった。

これでは早晚、騒ぎを聞きつけた他の住人たちが怒鳴り込んでくるだろうと、恭は諦めたように溜め息をつき、怠くて堪らない上体を起こし、フラフラとソファーから立ち上がった。

細身の黒いコットンパンツに包まれた脚が細かく震えていた。立っていることもおぼつかない足取りで部屋を横切り、ようやく扉にたどり着く。

「うるさいっ……」

安い造りの扉だから、ドア越しでも十分に聞こえる。低い恭の唸り声に、案の定、凶暴なノックは静まった。

「開けろよ、恭……」

「帰れ……」

冷淡に告げた言葉には、神経を逆なでされるようなうれしそうな笑い声が返ってきた。

「帰っていいのか？ そろそろ困ってるんじゃないかと、わざわざこんなところまで来てやったのに……」

「市警はそれほど暇じゃないだろう、六道警視……？」

かつての同僚は、恭が刑事の職を追われたこの二年間も着実に実績を重ね、さらに昇進していた。現在の階級で呼ぶ恭の口調は、感情を押し殺そうとする意思に反して、いくらか皮肉めいていたかもしれない。

「俺は有能だからな。発情している恋人を抱きにくる時間ぐらいいはあるさ」

「誰がっ……！」

わざとらしく「恋人」と囁く声音にはどこか嘲りのようなものさえ感じられて、恭は屈辱に唇を噛んだ。

突然、 Ω であることが発覚し、規定により市警での地位も職も奪われた。最高の相棒だった男に蔑まれる存在へと堕ちたのだ。

今の恭は、六道にとって恋人どころか、ただの欲望を吐き出す抱き人形でしかない。

たった二年前までは同じ男で、市警では検挙率で鎬を削った好敵手であり、親友だと思っていた六道に、もう何度、あさましい姿をさらしたかわからない。

恭は Ω で、六道は α だったのだ。

本能の欲求には逆らえないことを何度も体に教え込まれて、それでも恭の心は現実を受け入れることができずにいた。

それどころか、二年前よりもいっそう歪み、身も心も壊れていくような恐怖は日ごとに深まっていく。

自分はいったいどこまで正気を保っていられるのだろうか？ そんな疑問を抱きながら、恭はこの小さなアパートに身を隠すようにひっそりと生きてきた。

表向きは《宗方探偵事務所》の看板を掲げているものの、半分スラム街に脚を突っ込みかけた探偵にまともな仕事はない。

ここ三日ばかりは、ろくな食事もしていなかった。おまけにその最悪な時期に発情期が重なり気分も地の底を這っていたところでの六道の暴力的な訪問は、恭にとって災厄でしかない。

それなのに、耳に馴染んだ男の声を聞くと、思いとは裏腹に体の芯がツキンと疼いて狂おしい熱をおびていく。

どうしようもなく胸が苦しかった。

相棒としての六道は、彼の言葉どおりに妬ましいくらい有能で、犯罪アナリストとしての視点も鋭く、恭は誰よりも彼の意見を信頼していた。優秀なのは頭脳だけではなく、逮捕術も群を抜き、特に射撃の腕は市警でも一、二を争うほどだ。

自信家なところはあるが、それも鼻につくほどではなく、上司からは一目置かれ、同僚からは羨望と絶対の信用を得ていた。

恭は彼の相棒であることが誇らしかつたし、家族同然に心を許していた。彼のことが、好きだった。

しかし、それは決してこういう意味ではなかったはずだ。

「ここを開けろよ。でなきゃ、一晩中ドアを叩き続けるぞ」

六道のあからさまな脅迫に、恭は一瞬ムツとした。けれど、イラつく気持ちとは真逆に心臓の鼓動はますます速くなる。

Ω の性が、理性の及ばない激しい欲情が α を、番を求めてしまう。そんな自分を、恭は堪らなく恥じていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>